

東京 2020 大会開会式における効果的な演出の検討

スポーツマネジメントゼミナール 1315062 山田 凜

1. 研究動機・研究目的

世界最大のスポーツイベントであるオリンピックは、全世界の人々の注目を集める。中でも、開会式は様々な工夫が凝らされたエンターテインメントショーとして、大会の開催を大いに盛り上げ、観客の心を感動させる。2018年2月9日に行われた平昌オリンピックの開会式では、ドローンを使用した演出、高画質な映像がフロアに投影される演出で幻想的な世界が表現された。2016年に行われたリオデジャネイロオリンピックの開会式では、AR技術を用いて会場の空間に33競技のシルエットが映し出される演出も行われた。このように、近年急速に発達したドローン・AR・VRなどの技術が様々な演出を可能にし、観客の感動をより高めている。4年おきに開催されるオリンピックであるが、時代の流れとともに社会の進歩を反映し、開会式や閉会式の演出も発展を遂げている。このような背景の中で、日本は2020年に東京五輪を控えている。過去の大会を上回る感動を観客に届け、日本や東京の魅力を観客に示すため、また世界に向けて日本から発信するメッセージを伝えるためには、どんな演出やプログラムを盛り込むべきであるかに関心が寄せられている。

そこで本研究の目的は、これまでに開催されてきたオリンピックの開会式において、観客を感動させるための演出や技術の変遷や特徴を検証し、人々を感動させ、メッセージを発信するオリンピックのセレモニーとはどのようなものか明らかにし、東京2020大会開会式の成功の一助となる提案を行うこととした。

2. 研究方法

本研究では、予備調査として、スポーツイベントセレモニーの企画・運営に携わった人物へのインタビューを行い、スポーツイベントセレモニーにおける重要視すべき観点を整理し、文献研究を行った。インタビューは、電通スポーツ局サッカー事業室国際サッカー部ディレクターを務め、過去にクラブワールドカップの大会トータルマネジメントや国際スポーツイベントの知見を持つ J.H 氏に対して、事前に用意した5つの質問項目に沿って、約50分程度のインタビュー調査を、1対1で実施した。分析には修正版グランデットセオリアプローチ (M-GTA) を用い、概念の抽出を行った。

本調査で行った文献調査は、直近 (2004-2016年) の夏季五輪大会の開会式を動画投稿サイト YouTube を用いて4大会分収集し、予備調査から抽出された概念の観点から考察を行った。また、東京2020大会について、2018年4月18日から11月20日の期間中に東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会などが発表した資料やテレビ、雑誌などでの関係者インタビュー記事などの文献を収集し考察を行った。

3. 主な結果と考察

スポーツイベントセレモニーにおける重要視すべき概念として、「スポーツイベントにおけるセレモニーの象徴的役割」「誰が誰のために何を伝えるかでテーマを構築」「費用対効果

を重視した演出」「固定プログラムの文化的価値の付加」「大多数のタブーの回避」「大多数に賛同される」「想定されるリスクの検討」「時事的配慮」「配慮すべき時事的事項の検討」「影響力を持つプログラム」「普遍的に価値のあるテーマ」「世界に誇れる普遍的魅力を総合的に見せる」「テレビ視聴者視点」「光を中心に使用した演出」の 14 の概念が抽出された。

これらの概念を基に、直近過去 4 大会の夏季五輪大会の開会式の考察を行った結果、共通した特徴として「平和」「多様性」や「自然」「環境」といった普遍的なテーマを表象した演出が必ず盛り込まれていたことが明らかとなった。また、開催国の歴史及び現代の文化を表現した演出が必ず盛り込まれており、固定されたプログラムにおいても、文化的、芸術的な側面をもつ演出が盛り込まれ、オリンピック開会式の文化的、芸術的な側面の強さを表していた。一方、近年の傾向及び変遷として、俳優や歌手など影響力をもつ有名人の出演が増加しており、開会式がエンターテインメントショーの側面を強くもつ傾向を表していた。また、近年のプロジェクトマッピング技術やスタジアムのフロアの液晶技術などの進歩により、場面に応じて会場のイメージを一瞬で変化させることができるようになっていた。

東京 2020 大会においては、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会によって開会式・閉会式に関する 8 つのコンセプト、式典プランニングチームメンバーが明らかになった。総合統括するチーフ・エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクターの野村氏は、自分とは異なる素地を持つ者の存在を受け入れる「和」の精神を日本のアイデンティティとし、この視点からオリンピックにおける普遍的テーマ「平和」や「共生」を表現する意図が明らかとなった。

4. 結論

東京 2020 大会開会式において伝えたいとしているコンセプトは、「平和」「共生」「復興」「未来」「日本・東京」「アスリート」「参画」「ワクワク・ドキドキ感」であった。野村氏が述べている日本のもつアイデンティティ「和」の精神を土台として、コンセプトである 8 つのメッセージを表現していこう。この価値観は「平和」「共生」というコンセプトにおいて重要であり、日本が世界に向けて伝えるべきメッセージである。リオデジャネイロ大会閉会式のハンドオーバーセレモニーにおいては、復興というコンセプトやアニメやキャラクターといった現代の日本の文化を表す演出がなされ、現代の日本の魅力も示されていた。一方、強く押し出されなかった日本の歴史的な文化について、野村氏の狂言師という視点からコンテンツを考え、オリンピック・パラリンピック開閉会式のプランニングチームの各方面の文化人による現代的、先進的なツールや演出で表現し、日本の文化の多様性、多面性を東京 2020 大会開会式において表現していくべきである。また、参画というコンセプトにあるように、AR・VR 技術を駆使しより開会式を間近で感じられるようなものにしていくことも期待される。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文の作成にあたり、適切な助言やアイデアを賜り、丁寧に指導して下さった小笠原悦子先生に感謝致します。また、大学院生の三倉茜さん、永井淳悟さんには細部にわたるご指導を頂き、橋本様にはお忙しい中インタビューを受けて頂きました。感謝申し上げます。